

オペレーショナル・リスク管理と シナリオ分析

平成18年7月

日本銀行金融機構局

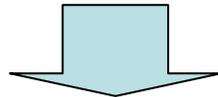
大山 剛

1. なぜシナリオ分析なのか

- オペリスク管理の新しい流れ→データ・統計解析に基づくオペリスク・プロファイルの把握・管理

しかし.....

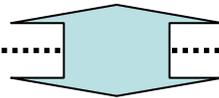
- 以下の理由から、整備されたデータベースには限界がある
 - 整備されたデータに基づくオペリスク管理の歴史は浅い
 - オペリスクを巡る環境は常に変化
 - 重要なデータの発生頻度に比してそもそも人生は短過ぎる



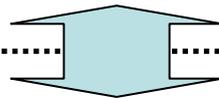
- 但し、オペリスク管理用に整備されたデータはなくても、我々には人間の長い歴史を通じて蓄積してきた様々な知識がある
 - 「シナリオ分析」の出番

2. 神様への挑戦

- オペリスク管理の対象は、神様のみが知る世界（現在から1000年後までに何が起きるか）



- 但し、事象によっては一定の周期性や癖が存在→これが将来繰り返されれば、将来の一部がみえてくる
- 一定の周期性や癖を読み取るのは、
 - 科学者
 - エキスパート
 - その他（預言者？）



- 以上の情報をどのようにオペリスク管理に落とし込んでいくか

3. 人間の限界の自覚

- 人間の想像力はたくましいが.....
- 実際に取り扱える事象は、一定の蓋然性を有し、オペリスク管理上対策を立案するインセンティブが存在するもの
 - 例えば...
 - 2200年:日本沈没
 - 2300年:火星人の襲来で地球滅亡
- 決して可能性がゼロだとはいえないが、(少なくとも今の段階では)対策のたてようがない
- それでは、大地震は？
 - ある程度の対策は可能(バックアップ、BCP等)
- シナリオ分析の活用→モラルハザード(extreme eventということで対策を怠る)を防ぐ働きも

4. オペリスク計量化のための シナリオ分析の課題

- Level Playing Fieldを確保するためには、銀行間で同じような世界観を共有する必要
- 網羅性の確保
 - (人間社会からみた)外部要因に基づく損失事象
 - 社会的要因に基づく損失事象
 - 内部要因に基づく損失事象
- 頻度・損失額の仮定
 - 情報を如何に(エキスパート<含む従業員>や科学者等から)引き出すか
 - 引き出した情報をどのように処理するか
- 議論・研究を通じた、オペリスク管理・シナリオ分析が対象とする「世界」に関する一定のコンセンサス形成は有用

5. シナリオ分析の将来的可能性

- オペリスク管理におけるシナリオ分析は、ある意味で先駆的
 - 信用・市場リスク等におけるシナリオ分析は、リスク計量化の「主」というよりは「補完的」手段に止まっている→主観的ストーリーの域を出ていない
- 経験知を、より客観的なデータに置き換え、リスク計量化に用いるというシナリオ分析の発想は、広い分野で応用可能



- 銀行が、広く産業界におけるオペリスク管理のリーディング・インダストリーとなる可能性も